

「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。」

「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。」

「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。」

（一）久住淳子さんの「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。」



2017年永眠。  
享年66歳。  
痛にたおれ  
した。  
を目標にいま

「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。でも、お母さんがお父さんと別れたのは、私に悪いところがあったからじゃないかなって思っています。」



久住淳子 著  
久住淳子さんの「お母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなが大好きです。」

このペーパーでは、生前、久住さんとの親交のあった方々に「久住さんとの思い出」について語っていただきました。



堀川淳子さん（西野厨房だんらん）

久住さんと親しく話をするようになったのは中島さんとの縁ですね。三人が一緒の場で会ったのは、時計台のホールで開かれた中島さんのトークイベント後の打ち上げ会場でした。「久住さん！」「あら、堀川さん？」と交流が始まり、中島さんが始めた久住書店の地下の「ソクラテスのカフェ」で開かれる「大学カフェ」に参加して手伝ったり、私のやっている「西野厨房だんらん」にご飯を食べべに來たり、中島岳志さん（東工大教授。本書では解説を担当）の結婚祝賀会の企画など楽しい思い出です。久住さんは書店の運営とかご家族の病気とかいろいろな困難を抱えていながら、いつも穏やかで飄々と淡々として突如「琴似駅前に山羊を飼おう！」などと言いだしたり。「これを読め」、次の対象は？という話が出たときに「おばさんはこれを読め」なんてやめてね、と言ったら「そうかそれはいらぬか？」と笑っていましたが、その時「おばさん」にどんな本を指南したのか聞いておけばよかったなと少し後悔しているところです。

発行記念  
フリーペーパー



久住さんの思い出



## 矢萩多聞さん (装丁家)

本の装丁も始!

はじめて久住さんに会ったのは、二〇〇七年二月のこと。中島岳志さんからは「くすみ書房が気に入らずで、琴似に引っ越した」と聞いていたので一体どんなスゴイ書店なんだろう、と期待していたが、はじめてお店をみたときはすこし拍子抜けした。雑誌も漫画も参考書も文房具もある、なんてことない町の本屋に見えたからだ。失礼ながら、店長の久住さんはフツの本屋のオヤジという印象で、「売れない文庫本フェア」などのとんがった企画を次つぎと生み出した人物には思えなかった。

しかし、すこし店内を回ると、単純にジャンル別で棚に収まっているようにみえた本たちが、実はある文脈で並べられていることがわかった。地元の本をセレクトした棚があり、他の書店ではみないような本が面だしポップ付きで一押しされている。本をインテリアの一部にしか思っていないようなおしゃれなセレクト系書店とはちがう。神保町にあるような頑固親父が経営する玄人好みの店でもない。週刊誌があり、趣味や手芸の実用書があり、トンボの鉛筆やジャポニカ学習帳が並ぶ、同じ店内にまっとうな人文書や、硬派な文学がでしゃばりすぎず、ピリッと置いてある。

二〇一四年、自著『偶然の装丁家』の執筆中、ぼくは久住さんに原稿ゲラを送り、アドバイスを求めた。ほんとうはくすみ書房の経営不振でそれどころじゃなかったはずなのに、電話をかけると小一時間でも相談に付き合ってください。本が出版された数ヶ月後、大谷地のお店で刊行記念トークイベントをした。その打ち上げの席でぼくが、こういう刊行イベントって、発売日から何ヶ月後ぐらいまで許されるんですかねえ? と冗談交じりに聞いたら、久住さんは真剣な顔で、すつと答えた。

「一年後でも二年後でもかまわない。気長にやっていたらいいですよ」  
発売日なんてものは書店や出版社、取次が気にしているだけで、読者がその本にどんなタイミングで出会うかは誰にもわからない。むしろ、絶版にならないかぎりには、いつまでも売れる。

「お客さんが本を手にとって読み始めたときが新刊です」  
その後、数えきれないほど本のイベントを開催してきたが、いまでもトークに登壇する前には、あのとときの言葉を心のなかで反芻して、自分を奮い立たせている。

残念ながら久住さんの夢の書店は実現しなかったけれど、ちいさな蝶の羽ばたきが地球の裏側に影響を及ぼすように、きつと想像もつかないところで、誰かの手のなかで花ひらく本もあるだろう。それだけを信じて、これからもまっさらな気持ちで本を手渡していきたい。



## 吉成秀夫さん (書肆吉成店主)

又作さんのお弟子

琴似のくすみ書房にほど近い発寒商店街のお祭りの古本市に参加したとき、はじめて久住さんにお会いした。私はそれ以前自作の冊子「アンプルバル通信」の販売をくすみ書房に委託したまま放置していたので、不意の初対面に緊張が走ったが、久住さんは終始にこにこ明るく穏やかで、私の心配はすぐに消えた。くすみ書房が大谷地に移転してからはトークイベントを何度か開催した。私の持ち込み企画を快く受け入れるばかりか、毎週でもやりたいと言ってくれた。その寛容と信頼が嬉しかった。くすみ書房閉店作業は深夜に及ぶ過酷なものだった。心身ともに超多忙消耗の久住さんに対して本棚什器を頂戴したいと申し入れたときも二つ返事で、私の希望する以上の本棚を譲ってくれた。後日円山茶寮という喫茶店でお会いしたのが最期となった。新しい本屋の構想を聞いて、正直驚いた。あれだけ大変な目にあってなお本気でまた本屋をやるうとしているなんて。久住さんは生涯書店人であった。

## 森田真生さん (独立研究者)

くすみ書房のオチンコ!

二〇一四年の冬にくすみ書房で三島さんと対談をさせてもらった日の夜に、初めて久住さんとゆっくりお話することができました。この日のイベントに参加してくれた札幌の学生さんたちと一緒に「数学の演奏会 in 札幌」を実現しよう! とおっしゃってくださったときの優しく情熱的な眼差しがいまも印象に残っています。美味しい中華料理をご馳走になり、この夜タクシーでホテルまで見送っていただいたのが、久住さんと過ごした最後の時間になりました。

久住さんと初めてお会いしたのは、同じ年の夏、ミシマ社主催の「数学ブックトーク in 札幌」の日です。ブックトークでも、一般的には「売れていない」本を紹介することがあります。ちょっとした「売れない本フェア」になることもしばしばです。二回しかお会いしていないのに僭越ですが、売れない本を手にももらえる喜びは、僕にもちょっとわかります。とっておきの売れない本をこれからも探し続けますね。